Osaka University Knowledge Archive

Title	范畴化理论背景下的现代汉语对举格式研究
Author(s)	王, 峰
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61831
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　王　峰　　）	
論文題名	范畴化理论背景下的现代汉语对举格式研究（現代中国語対挙格式研究―カテゴリー化理論を背景に）

論文内容の要旨

论文摘要（中国語）

汉语中存在这样一种语言形式：由前后两个部分组成；两个部分结构相同且在某个相同的句法位置上存在成对举出的语言成分。本文称这种语言形式为“对举格式”。在外延上有所交叉的“对偶”“对称”“对举”一组概念中，“对偶”更注重语言形式的“修辞”属性，“对称”与“对举”更着重语言形式的“语法”属性，其中“对称”更注重静态的结构分析，“对举”更注重动态的结构与成分间的互动分析。

对举成分之间的语义关系，历来有“相同、相对”“近义、反义”“类义”“虚化、泛化”等说法。这些说法反映了研究者对对举成分的两个观察角度：一是两个对举成分之间的语义关系；二是单个对举成分的表义特点。本文认为这两个方面是构成“对举”的两个必要条件，即单个语言成分自身表义上的“概念化”特点与两个具有相同相似概念化语义特征的成分的成对出现。本文将对成分对举背后所反映的认知机制归为“范畴化”。它包括两个方面的内容：一是个体事物的范畴化认知，二是不同事物的“同范畴化”认知。“相似性”是构成这种范畴化认知的基础，同时这种范畴化认知也具有一定的民族文化特点。

对举成分背后的这种“范畴化”认知特点在格式整体语义的构建中具有重要的作用，本文用认知语言学中的“心理空间”理论尝试对四字对举格式的语义构建过程做出了解释：1）对举格式中的前后两个部分分别对应两个输入空间，其中对举的两个成分之间存在一定的映射关系；2）对举成分在类属空间进行概念整合，产生一个更为抽象的语义内涵；3）在合成空间中，整合而成的语义内涵被代入由输入空间继承而来的组织结构，最终形成“浮现意义”，完成结构意义的构建。

方位词对举在对举格式中是一个比较特殊的类，其中对举的方位词已经具有了一定的“格式标记”的语法地位，这和方位词在汉语史上所经历的发展变化有着密切的关系。本文以“左VP右VP”对举格式为例，对这一格式的“语法化”过程做了一个详细的考察与分析。结论认为这一对举格式源于古代汉语中的主谓并列句，其中的方位词“左”“右”在表义上经历了“[身体部位]-[处所]-[方向]-[-方向]”的发展演变过程，相应地，整个结构经历了“主谓并列-状中并列-对举格式”这样一个发展过程。从中可以看出，方位词对举格式的语法化过程实际上是在方位词所表语义范畴的不断变化与语言结构功能的不断变化的交互作用中形成的，这也是结构语法化的一般规律。同时本文还指出，对举格式中方位词表义上的“非范畴化”现象实际上是结构表达功能上的一种“范畴化”现象，也就是完成“方位词+VP”结构功能从“事象表达”向“属性表达”的转变。

本文将可以后加“的2”的对举格式统称为“短语对举格式”。这类格式中对举的单项往往不具有格式整体所具有的表达功能。本文研究认为，成分的对举使得某类句法结构中某个句法位置的语义内容产生变化，进而改变了整个结构的表达功能。综合仁田義雄、影山太郎、工藤真由美等几位学者对事态类型的研究，我们可以知道：“动作-状态-属性”是事态的三个基本类型，三者的差异主要表现在“时间限定性”的有无以及“时间上的内在展开过程”的有无上面；三种事态类型之间并非是截然分开的，而是构成一个认识上的连续体，而且在人的认识过程中，一种事态类型完全可以转化为另一种事态类型；同时，“时间限定性”的有无与人的“知觉体验”也有着密切的关系。汉语中的对举格式正是体现了人们对事态的这种认知转换过程：动词短语中主语成分、宾语成分、修饰成分、动词成分的对举会引起语义上的“泛化”“不定指化”“概念化”等变化，而与这些语义的变化相对应的是认识上的“一般化”过程，也就是“时间的抽象化”过程，这使得整个短语结构所表达的事态类型从“动作”转向“状态”；性质形容词表示“属性”，不具有“时间限定性”，因此与汉语主谓结构中谓语成分的“陈述性”特征不相融合，也就不能独立充当谓语成分，而在对举格式中，两个对举的性质形容词往往表示某种“对比、对照”，具有认知上的“知觉体验”性特征，这使得它所表达的事态带有了“时间限定性”特征，进而能够独立充当对举格式中的谓语成分。总之，短语对举格式表现的是人们对某种“状态”的认知结果，因此我们认为这类格式属于汉语中的“状态表达”语法范畴。

朱德熙先生将形容词重叠形式AA的、AABB（的）、ABB归为“状态形容词”一类，本文将此三类形式与短语对举格式AXBY放在一起进行了考察，发现这些与“状态”有关的表达形式在“带的”与“不带的”的问题上表现出一定的共性。

具体来说就是：谓词性成分在“内在时间性”和“外在时间性”上都表现出[+过程]和[-过程]的对立，内在时间性过程体现为某一事态随时间的进行而展开，外在时间性过程体现为某一事态构成外部时间流逝中的某一具体事件，以上几类语言形式在使用上表现出一定的倾向性，“不带的”形式与具有[+过程]特征的谓词性成分搭配能力强，而“带的”形式与具有[-过程]特征的谓词性成分搭配能力强。具有[+过程]特征的谓词性成分在语言表述上呈现一定的“动态性”特征，而具有[-过程]特征的谓词性成分在语言表述上呈现一定的“静态性”特征，因此我们认为汉语中的状态表达形式具有“动态形式”和“静态形式”的对立，“带不带的”是其重要的形式标志。

本文将由两个含有对举成分的小句构成的语言形式称为“小句对举格式”。小句作为最基本的信息交流单位，都具有完成某种言语行为的“潜在能力”。汉语中“对举”的语言形式正是通过激活这种“潜在能力”，使小句表现出单用时不能凸显的言语行为功能。本文结合具体的实例分析了汉语中几类“小句对举格式”所对应的一些“言语行为范畴”，包括“属性对比”“条件陈述”“委婉否定与礼貌评价”“对照说理”“场景描述”等等几个类型。“属性对比”中的小句具有“属性叙述句”的特点，这类小句都有一个共同的语义结构“X is P.”，也就是说对比的主体充当话题成分X，而对比的内容充当述题成分P。这种语义结构决定了一些不能单用的附加语主语句、性质形容词谓语句、名词谓语句在“对举”环境中的“合法性”。紧缩条件句的对举和此类紧缩复句所表达的“言语行为域”有着密切的关系：要理解紧缩条件句所传达的语义信息，必须要建立起联系“条件”与“结果”的认知框架，单个的紧缩句往往不能提供这种认知框架，而对举格式中成分对举背后隐含的“范畴化认知”特点却能够为这种认知框架的构建提供信息基础，从而使小句所传递的语义信息得到解读。汉语中还有一类小句对举格式与话语交际中的“礼貌原则”有着一定的关联，这一会话原则要求说话人在涉及有损对方面子的话语上，要表现得婉转与含蓄，如“指东说西”“避重就轻”等会话策略，与此同时，听话人在具体的语言环境下也能够通过推理理解说话人的本义，这些都构成了此类小句对举格式中语言编码与解码的基础。通过对两种事物的对比或一种事物对另一种事物的映衬等方式可以凸显某种道理，因此表达这类认知活动的对举格式经常是汉语中的一些格言警句，它们都属于“对照说理”言语行为范畴。此外，在对某个活动场景进行描述时，说话人也常常将一对范畴化的成分编入语言形式—即采取“对举”的手法，构建起语义理解过程中所必须的认知框架，这些对举格式都属于“场景描述”言语行为范畴。

对举格式是汉语中具有独特表达功能的语法形式，然而通过对教学大纲以及汉语教材的调查，我们发现目前的汉语教学并没有体现出对举格式在汉语语法体系中应有的地位和价值。同时，学习者即使到了中高级阶段对该语言形式的辨别、理解与使用上仍然存在诸多问题。本文通过一则对日本学生的语言调查发现，学习者在对举格式的学习中主要存在以下几个难点或影响因素：1）范畴化认知方式；2）格式语义中的概念整合模式；3）母语迁移。针对这些难点或影响因素，本文提出以下几点教学建议：1）以基本层次概念词为选择标准，结合文化词语的教学进行学习者文化认知能力的培养；2）根据汉语的文字、韵律特点适当进行语素、韵律教学；3）将对举格式作为一个语法条目进行集中教学。针对第三点建议，本文还进行了一则教学实验研究，以检测“格式教学”的有效性问题。实验结果证实采用“格式教学”的方法要比单纯的意义讲解的方法对于提高学习者对此类语言形式的语义理解与记忆以及辨识率方面都具有更好的教学效果。

論文要旨（日本語）

中国語にはつぎのような言語形式の存在が認められる。「前部と後部の二つの構成要素からなり、どちらも同じ文法形式をとり、かつその文法構造において対句的な形で言語表現される。」本稿では、こうした言語表現を「対挙形式（“对举格式”）」と呼ぶ。外延的定義から見た場合、対挙形式に関連する概念として「対偶（“对偶”）」「対称（“对称”）」「対挙（“对举”）」が挙げられるが、「対偶」は言語表現の「修辞」的属性に、「対称」及び「対挙」は「文法」的属性にそれぞれ着目したもので、さらに「対称」は静的な構造分析に、「対挙」は動的な「構造 - 構成要素」間の相互分析に着目したものであると言える。

対挙形式に用いられる構成要素間の意味的関係については、これまでの先行研究などで「同等（“相同”）、相対（“相对”）」、「近義（“近义”）、反義（“反义”）」「類義（“类义”）」「虚化（“虚化”）、汎説（“泛化”）」といった用語でもって考察がなされているが、本稿では、対挙形式が表すこれらの意味的特徴が認知活動における「範疇化（“范畴化”）」に由来するもの、すなわち異なる二つの個体を一括りにした際に産出される、いわば「グルーピング（“类”）」という認知活動によるものだと考える。こうした認知過程（「範疇化」）には、個体間の「類似性」がその基盤にあり、ときに民族的、文化的要素も関わってくる。対挙形式の背後にあると考えられる、この「範疇化」という認知的特徴は、対挙形式全体の意味形成において大変重要な役割を果たしていると思われる。そこで本稿では、認知言語学における「メンタル・スペース」理論を用い、「＜四字＞型」対挙形式の意味形成過程について、つぎのような主張をする。1）対挙形式の前部と後部にはそれぞれ構成要素が配置される「入力スペース（“

输入空间”）」があり、対挙をなす２つの構成要素間には一種の「写像（“映射”）」関係が認められる。2）対挙をなす構成要素は、「タイプスペース（“类属空间”）」において概念整合が行われ、より抽象的な意味内容を産出する。3）「融合スペース（“合成空间”）」では、概念整合によって産出された意味内容が「入力スペース」から引き継いだ構造に書き込まれ、最終的に「新たな意味“浮现意义”」が構築され、構造全体の意味特徴が決まる。

「＜方位詞＞型」対挙形式は、対挙の構成要素となる方位詞自体が「対挙マーカー（“格式标记”）」としての文法的役割を果たしており、この点において、いくつかある対挙形式のなかでもやや特殊なタイプとなる。これについては、方位詞の通時的変化と密接な関わりがあると考えられる。本稿では、「“左VP右VP”型」対挙形式を取り上げ、このタイプにおける「文法化」過程を考察し、詳細な分析を行う。ここでの結論として、「“左VP右VP”型」対挙形式が古代中国語における「主述並列文（“主谓并列句”）」を起源とし、方位詞“左”、“右”が［身体部位］－［場所］－［方位］－［-方位］といった意味的変化の過程を経ることによって、これに伴い「“左VP右VP”型」対挙形式の構造全体が「主述並列－連用並列－対挙形式」と変化してきたことを主張する。ここからも明らかなように、「＜方位詞＞型」対挙形式の文法化は、事実上、方位詞が表す意味範疇の変化と言語形式の構造変化との相互作用によって実現しており、一般的な言語構造の文法化にも認められる傾向、規則にあてはまる。また、対挙形式における方位詞が意味的に「脱範疇化（“非范畴化”）」するということは、もう一方で、文法構造の表現機能の「範疇化」現象が起こることとなり、つまりは「方位詞+VP」の表現機能が〈事象〉叙述から〈属性〉叙述へと変化してゆくことを指摘する。

本稿では“的2”を付加できるタイプを「“短语”（句）型」対挙形式と総称する。このタイプでは、対挙形式として有する表現機能を、それぞれの構成要素（“单项”）が単独で表すことはない。この点について、本稿の主張では、構成要素が対挙形式で用いられることにより、その構造が本来有する文法的、意味的関係に変化をもたらし、さらには構造全体が持つ表現機能にも影響を与えると考える。仁田義雄氏、影山太郎氏、工藤真由美氏などによる「事態」タイプに関する研究では、事態には〈動作〉〈状態〉〈属性〉の３つの典型タイプがあって、三者の相違はおもに〈時間的限定性〉の有無と〈時間的な内的展開過程〉の有無に関わるとされている。また、この３つの事態タイプは明確に区分できるものではなく、いわゆる「連続体」をなし、場合によってはヒトの認知過程のなかで、ある事態タイプが別の事態タイプに変化（転換）することもあり得るとされ、さらに〈時間的限定性〉の有無はヒトの「知覚体験」とも密接な関係があると考えられている。中国語の対挙形式による言語表現は、まさにヒトの事態に対する認知的転換過程を表出したものである。たとえば、動詞句の内部構造における主語成分、目的語成分、修飾語成分、動詞成分による対挙形式は、「不定化（“不定指化”）」、「概念化（“概念化”）」などの意味的変化を引き起こし、認知過程の「一般化」、つまり「時間的抽象化」が起こる。これにより句構造全体が表す事態タイプが〈動作〉から〈状態〉へと変化する。「性質形容詞」は〈属性〉を表し、〈時間的限定性〉を有してない。このため中国語の主述構造内部における述語成分が持つ〈叙述〉特性とは相容れず、単独で述語成分になることができない。しかしながら、対挙形式においては、対挙となる２つの性質形容詞の間に「対比、対照」という意味関係が生じ、ヒトの認識として「知覚体験」といった感覚を持たせることにより、対挙形式が表す事態に〈時間的限定性〉が付与され、さらにはそれぞれの性質形容詞が単独で対挙形式内部の述語成分になることができる。つまり、「“短语”（句）型」対挙形式が表す意味は、ヒトのある〈状態〉に対する認知過程の結果であり、このタイプの対挙形式は中国語の〈状態〉叙述といった文法範疇に属することになる。

朱徳熙氏は形容詞の重ね型「AA的」「AABB（的）」「ABB」を「状態形容詞」の一種として分類しているが、本稿では、この３つの形式と「“短语”（句）型」対挙形式である「AXBY」とを一括りにして考察を行い、これらの文法形式が〈状態〉と関連する言語表現において、「“的”を付加するか否か」という点で共通性を見出すことができることを指摘する。具体的には、述語性成分が〈内在的時間性〉と〈外在的時間性〉の点において、いずれも［±過程］の対立をなしていると考えられており、〈内在的時間性〉の過程においては、ある事態が時間軸に沿って進行、展開してゆき、〈外在的時間性〉の過程においては、ある事態が外部的時間の流れで具体的な事柄として起こる。実際の言語形式を見てみると、「“的”が付加しない」形式では［+過程］の特徴を持つ述語性成分との親和性が高く、「“的”が付加する」形式では［-過程］の特徴を持つ述語性成分との親和性が高い、といった傾向を認めることができる。また、［+過程］の特性を持つ述語性成分は表現機能として〈動的〉特徴を示し、［-過程］の特性を持つ述語性成分は〈静的〉特徴を示す。こうした文法現象に基づき、本稿では、中国語の〈状態〉表現には〈動的〉形式と〈静的〉形式の二項対立が存在し、“的2”がその重要な文法マーカー的役割を担っていることを主張する。

本稿では、「“小句”（節）」からなる２つの対挙構成要素を含む言語形式を「“小句”（節）型」対挙形式と呼ぶ。中国語における“小句”（節）は最も基本的な情報構造の単位であり、いわば「言語行為」を完結し得る「潜在能力」を持っている。中国語の対挙形式による言語表現は、まさにこうした「潜在能力」を顕在化させることであり、

これによって、“小句”（節）自体だけでは際立たせることができない言語行為としての機能を表出させることが可能となる。この問題について、本稿では具体的な実例をいくつか取り上げ、「“小句”（節）型」対挙形式に対応する、「属性対比」「条件叙述」「婉曲否定とポライトネス評価」「対照的に道理を説く（“对照说理”）」「情景描写」などといったタイプの「言語行為範疇」を分析する。「属性対比」となる“小句”（節）は「属性叙述文」としての性質を帯びており、いずれも＜X is P.＞（主題部＜X＞は対比される主体、題述部＜P＞は対比される内容）といった意味構造を共有している。この意味構造が基盤となって、通常単独では用いることのできない付属語主語文、性質形容詞述語文、名詞述語文が、対挙形式といった言語環境において適格文となり得る。「緊縮型条件文」の対挙形式については、同じ構造である「緊縮型」複文が表す「言語行為の領域」と密接な関わりを持っていると考えられる。緊縮型条件文が表す意味情報を理解するためには、〈条件－結果〉関係といった認知領域が構築されなければならないが、単独の緊縮文だけでは通常こうした認知領域の構築は不可能である。しかし、対挙形式では、構成要素間の対挙の背後に存在する「範疇化」といった認知的特徴によって、認知領域の構築に必要な情報基盤が提供され、“小句”（節）が表す意味情報を解釈することが可能となる。また、中国語の「“小句”（節）型」対挙形式には、対人コミュニケーションにおける「ポライトネス理論」との関連性が認められるものも存在する。この理論に基づくとするならば、話し手が聞き手を不快にさせる談話内容に触れようとする際、話し手には〈婉曲的な〉表現や〈含みのある〉言い回しを用いることが求められる。たとえば、“指东说西”（あれこれと無関係な事を言う）や“避重就轻”（重要な事を言わず、関係のない事を話す）などの談話戦略がまさにこれに該当する。同時に、聞き手も実際の談話環境下で話し手の〈本意〉を推測し、理解することが可能となるが、これらはいずれも、このタイプで使用される「“小句”（節）型」対挙形式の言語形成と解釈の基盤をなしている。２つの事物の〈対比〉や相反する２つの事物による〈際立ち〉などの手法を通じて、ある〈真理〉を顕在化させることができる。このタイプの認知活動を言語表現化する対挙形式は、中国語の「格言」や「警句」によく見られる。これは「対照的に道理を説く（“对照说理”）」という言語行為の範疇に属している。このほか、ある活動の情景について描写を行う際に、話し手がしばしば「一対をなす概念化した成分」を言語形式化して（即ち対挙形式の手法を利用して）、その意味を理解するうえで必要となる認知領域を構築させることがあるが、このタイプの対挙形式は「情景描写」という言語行為の範疇に属している。

対挙形式は、中国語のなかでも特殊な表現機能を持った言語形式と言えるが、現行の中国語教育綱領や中国語教科書などを調査した結果、中国語教育において、対挙形式に関する教学内容が大きく欠落していることが明らかとなった。実際に、中・上級レベルにある中国語学習者でさえも、対挙形式に対する理解や識別、その使い方などの点において、なお多くの課題が残っていると考えられる。そこで本稿では、日本人学習者を対象に行ったアンケート調査によって浮き彫りとなった、中国語学習者が対挙形式を習得する際の問題点やそれに影響を与える要因をつぎの通り指摘する。1）認知方式である概念化、2）対挙形式の意味内容に関する概念整合モデル、3）母語の転移。これらを踏まえたうえで、対挙形式に関する教学内容について、つぎのような提言をする。1）基本レベルとなる概念語を選択基準とし、文化用語も取り入れた教学内容にすることで、学習者の文化的背景知識を養う。2）中国語の文字、韻律の特徴に基づき、語素（形態素）や韻律に関する知識教育を行う。3）対挙形式を文法事項として取り上げ、重点的に学習させる。なお、３点目の提言については、実際に教育実践を行い、対挙形式の学習効果を調査した。結果は、簡単な意味解説に留まった教授法よりも「対挙教学」を取り入れた手法のほうが、学習者の対挙形式に対する意味理解力や記憶定着率、また識別能力などの様々な点において、より高い効果が得られることが判明した。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　王 峰　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	古川 裕
	副 査　教授	杉村 博文
	副 査　教授	青野 繁治
	副 査　特任准教授	張 恒悦
	副 査　特任准教授	亓 华

論文審査の結果の要旨

『范畴化理论背景下的现代汉语对举格式研究』（範疇化理論における現代中国語対挙形式研究）と題された本論文は、古今を通じて中国語で多用される「対挙形式」を範疇化という枠組みの中で捉え、その諸相を総合的に捉えようとした好論文である。

「対挙形式」は「対偶」や「対称」などという概念や用語との交わりがある故に、これまでは修辞学的な角度から論じられることが多かったが、本論文では修辞学的な静的分類を敢えて遠ざけ、「対挙」を生産性の高い言語構造として捉え、その言語構造を成立させる構成要素間の相互分析を動的に捉えることを目指している点に問題設定の特徴がある。この点において、本論文のテーマ設定に新規性を認めることが出来る。

本論文は研究の中心部分をなす第四章から第七章を核として全八章立てで構成されている。
第一章では、範疇および範疇化を巡る言語研究の流れを概観し、中国語では語形成レベルからフレーズレベル、文形式レベルに至るまでの各段階で対挙形式が成立しており、その背景には範疇化、特にグルーピングという認知活動が重要な役割を果たしていると主張している。
第二章では、「対偶：対称：対挙」などの概念や用語を明確に区別するための考察が行われ、本論文の研究対象である対挙形式の範囲と研究目標が提出されている。
第三章では、対挙形式を言語構造として捉えた場合の議論が展開されている。この章では、対挙を構成する成分について、中国語母語話者ならではの実例を多数挙げて論じており、空理空論に陥ることなく議論が深化している点を評価できる。
第四章では、方位詞がペアで共起する対挙形式を取り上げている。ここでは、方位詞の対挙形式について、古代漢語から現代中国語に至るまでの通時的な様相を視野に入れて論じており、本論文の考察に厚みと広さを加えている。なお、本章で得られた研究成果は、本論文執筆中に中国の言語教育研究専門誌（2016年12月刊行『漢語学習』）に採用され掲載されている。
第五章では、フレーズレベルの成分が共起する対挙形式を論じている。この章では、フレーズ内部の体言的要素が具体的な指示対象を失って一般化し、用言的要素も時間性を喪失し状態化することを指摘している。本章の研究内容は、前章と同様に本論文執筆中に投稿され、中国の言語理論研究専門誌（2017年1月刊行『語言教学與研究』）に採用掲載されて、学界の注目を集めているものである。
第六章では、前章の考察を更に広げて、フレーズより更に大きなレベルである文形式の成分がペアで共起出現する現象を論じている。ここでは構文論から語用論へと考察の視野を広げて、対挙形式が条件の提示や婉曲的な否定などを伝えるのに適していること、更には、一つの道理や主張を二つの要素の対にして述べることでことがらの道理を主張しやすくなるために、諺や固定的表現などに対挙形式が多用されることが指摘されている。

第七章では、ここまで論じてきた対挙形式を中国語の教育現場で如何に教えるか、特に、漢字の知識を母語として持っている日本人学習者に対してどのように教えるべきかを論じている。ここでは、日本人学習者が既に身につけている漢字知識は対挙形式の理解には一定の助けとはなるが、文化的な差異に注目させることや韻律面を含めた語感の養成に注力すべきであると主張しており、この主張は説得力を持っている。
この章で理論的な分析結果や解釈を教育に応用するための基礎分析と提言を行っている点は、本論文が評価されるべき点の一つでもある。本章での議論は現在のところ『国際漢語教学研究』誌において査読を通過し、掲載待ちの段階にある。
第八章では、本論文の結論がまとめられ、述べ残した問題と今後の課題と研究の展望が述べられている。

本論文は、言語事実の収集と記述において豊富な実例を提示しており、付録１に添えられた対挙形式のリストは教育現場でも有用な資料となることが期待できる。また、関連分野の先行研究に広く当たっていることも評価すべきであるが、同時に、先行研究の主張と本論文独自の主張が明確でない箇所が散見するのは修正を要する点である。
論文の文章は明確な中国語によって記されており、論文概要の日本語にも問題がない。ごく少数の誤字を除いて、論文執筆のスタイルや論文の構成にも瑕疵は見られない。

以上のことを総合的に判断し、論文審査担当者は全員一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を得るのにふさわしい優れた研究論文であると判断した。